

ふぞく新聞

4月21日(金)

Vol. 1
(Vol.61)

この姿が自然なのです

ふぞく幼稚園の十八年度が始まりました。男子四十一名、女の子三十六名、計七十七名でスタートしました。

入園式後の子ども達の様子にスポットをあててお知らせしていきたいと思えます。

バスに乗る直前まで笑顔でも、お母さんと離れる時に後退りする子、幼稚園に着いたものの涙が溢れ出て止まらない子、玄関でなかなかお母さんとさよなら出来ない子、遊戯室の中にいるものの一人困惑気味の子、楽しく遊んでいるようでも、視界からお兄ちゃんの姿が見えなくなるとあれ、どこ?」と不安になる子等々。

「この姿変ですか?」ダメですか?」だって初めての幼稚園ですよ。当然ですよ。いやこの姿が自然なのです。ここから始まるのです。

上段の続きです。じゃあ何故そのような当然な、自然な姿にありや……と多くの大人は思ってしまうのでしょうか?

きっとその理由は、その近くで数年前からいるかのように初日から笑顔で遊んでいる新入園児がいるのを見てしまったか、心の中で比較してしまったからでしょう。

その気持ちもわかりますが、みんな違うのです。環境も、生育歴も、何もかもです。違うところに意味があるのです。

それぞれ違う人が同じ場所で長所を認め合いながら、刺激し合いながら、共感していくことに意味があるのです。

まあ上記の姿だけ挙げると誰だって大丈夫?」となるので補足しておきますと、その子達が数分後、先生達と追いかけてこをしたリ、風船で遊んだり、かくれんぼして笑顔で遊んでいる姿も事実です。

独り言

今年度も『ふぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ふぞく新聞』って何?と思われる方、それは、年数は重ねたものの、子ども達の助けを常に借りながら日々保育をしている幼稚園教諭が、子ども達と遊び、過ごさせてもらった中で感じたことを思うがままに書いたものです。

当園の方針は『子ども達の遊びを応援する幼稚園』です。その応援方法の一つとして、この『ふぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を父母の方に伝えていきたいと思っています。勿論これらが全て正しいわけではありません。でも少し、ほんの少しでもいいので頭の片隅にという願いもあります。 柿原勝

ふぞく新聞

5月19日(金)

Vol. 2
(Vol.62)

良い循環と悪い循環

子ども達と一緒に日々過ごすさせてもらった中で色々な経験をする事が出来ました。勿論まだですが、あ、今は悪循環やあ」と感じる時もあれば、うんうん、今は良い感じ！」と感じる時もあります。さてこの違いを今回は自分なりに振り返ってみることにしました。

まず、悪循環になる際は得てして子ども達のことを良く見ていない、子ども達の声をしっかりと聞いていない時です。見ても、聞いてもいない人が偉そうに指示したり、注意したりすればどうでしょう？勿論気持ちは離れます。

気持ちが離れているから上手く伝わらず言葉がきつくなったり、時には怒ってしまうのでもっと関係が悪化していきます。そして最後に自分を責めて「あー」とため息がでるのです。

上記のように最後、自分のことを嫌いになつてしまつては子ども達に人を好きになることの大切さは伝えることは出来ませんよね。まず自分を好きにならないと！

それでは、良い循環の出発点はどこかという、まずはよく見る事です。そして子ども達の言葉を聞き逃さないように配慮することです。(完璧は無理ですが、意識を持つことは重要です)そして良いところをみんなに(みんなの前で)しっかりと誉めるのです。「ここではお世辞は必要ありません。なぜなら本当に良いもの、良いことはちゃんと伝わるからです。

そして誉められたことが自信となり、やる気等に繋がっていきます。やる気になったことで形(成果として)になってあらわれやすくなるのです。そしてまたそのことを誉められるのです。

独り言

今回の内容は、たかだか十年しか現場経験がない保育士が感じたことです。「そんなこと、当たり前でしょ」と思われる方がいて当然です。

じゃあ何故今回のような内容を書いたかといいますと、その当たり前が難しくなっているからなのです。

今世の中は、情報が乱れていて「どのような幼児教育が子ども達にとっていいのか？」どの年齢で何を教えるのがいいのか？」等々分かりずらくなってきました。お母さん方が迷うのは当たり前です。

そんな時に一番大切なのが、目の前にいる我が子を比較ではなくよく見ること、その我が子の声に耳を傾けることだと思ふのです。 柿原 勝

ふぞく新聞

6月2日(金)

Vol. 3
(Vol.63)

まだたった32日

上記の日数が何を意味しているか分かりますか？僕は子ども達の姿をみる時に「まだなのか、もうなのか」を自分の中で問い掛けるように心掛けています。

この日数は新入園児の保育日数です。六月になりました。子ども達は確かに幼稚園の生活にも慣れてきましたね。外遊びでは色水(サッカー)を、遊戯室ではままごと(戦いごっこ)を、お部屋では塗り絵(ブロック)をと色々な場所でも遊べる様になってきました。

でも待つて下さい。幼稚園にきた日数はまだたったの三十二日(五月末現在)なのです。時間に換算したら、四月は午前保育だったから…、約百二十四時間です。まだまだ色々な問題があつて当たり前、それが自然です。

子ども達のスローな流れと世の中の激しい流れはどうしてもマッチしません。

スピード優先主義では子ども達の心の中は中々育ちにくいと思っています。『ふぞく幼稚園』の柱である 子ども達の遊びを応援する」という考えは色々実感させる、体験させるだけでなく、このスローな流れを確保するという点にも意識をしっかりとおこななくてはと考えます。

絵本・紙芝居の充実がその一つでもありません。すぐ形として表れにくいものですが、心の中に着実に何か刻まれているようです。何故言い切れるかというと、年長児に紙芝居や絵本を読んでいる時「これ、ぼんださん(年中)の時にみた」と良いながら次〇〇になるもんね」と体をくっつけあつて楽しんでいるのです。ぼちぼち「か(借成社)の気持ちでいきましょう。」

独り言

上段の考え方には逆の考え方も当てはまります。

「まだ三十二日なのに、もうこんな幼稚園のこと知ってるだあ！」とか「まだ三十二日なのに、幼稚園で色々な遊びを覚えてんだあ」とか「まだ三十二日なのに、もう友達の名前を何人も覚えてんだあ」等々。

同じ状況をみても見る角度、見る視点を変えるだけでコメントが大きく変わるといふことです。苦手な分野ばかりに目を向けて短所を無くしようとすると、得意な分野、本人が喜んで行っている好きなことに目を向けて長所を更に伸ばしていく方が良いかと思えます。大切なことは子どもを変えるのではなく、大人が意識を変えることです。 柿原 勝

ふぞく新聞

6月16日(金)

Vol. 4
(Vol.64)

遠足のお楽しみから・・・

六月九日(金)は親子遠足のはずでしたが、公園の芝生の状態と気温の低さから延期としました。登園してきた子ども達から「行きたかったなあ!」という声がたくさんたくさん挙がりました。それだけ楽しみにしていたのです。

子ども達は数日前から「先生、もうすぐおやつ買いに行くの!」「先生はおやつ買った?」「ワクワクしているのが良く分かりました。(小学生時代、僕もおやつが楽しみでした)

延期になった日何故か僕のことを「うまい棒先生」と呼んでいる子もいました。深い意味はありませんが、きつとおやつに「うまい棒(十円の駄菓子)を買ったのでしよう。

そしておやつだけでなく、楽しみはほかにもあるのです。その一つがお弁当の果物です。

九日の昼食時間、果物でクイズを楽しんでいました。「今日の果物なーんだ?」と言ってお友達と楽しそうに話しています。

遠足ということでお母さん方もいつもとちよつと違う果物を用意していた方が多かったように思いました。

ある園児は「イチゴ!」と僕が答えると「フッ、ヒントはねえ、パ!」がつくの!とす

ぐに教えたくて仕方がないという感じですが、わかった、パイナップル!というところ、

正解、見る、甘いんだよ!」と言っています。

そのほかにも「すいか」「アメリカンチェリー」

「イチゴ」「うさぎリンゴ」等がありました。

そんなクイズを答えているうちに自分の

小学生時代のことを思い出しました。僕は

秋の遠足に必ず「栗ご飯にしてね」と母に頼

んでいました。今でもその時の嬉しさは心に

残っています。物の奥にある気持ち!」

独り言

豊かになった反面、小さなことに喜びを見出せなくなってきた。日本人が増えてきたと最近読んだ本に書いてあった。

今回子ども達のおやつの話や果物クイズを通じて「そうでもないぞ!」と思った反面、「あ!」と反省が・・・。

大人のリアクションが子ども達を変えていることに気付いた。珍しい果物に大きな反応をしている自分がいる。

僕自身、幼稚園時代のお弁当の果物にはこだわりがあった。それは『うさぎりんご』だった。りんごは確かに好きだったけど、お弁当の蓋を開けた瞬間にそれ以上の喜びがあった。これを機に自分の行動を見直したい。 柿原 勝

ふぞく新聞

6月30日(金)

Vol. 5
(Vol.65)

運動会当日の姿の過程

ふぞく幼稚園の運動会がせまってきました。五月の後半から少しずつ遊びの中に競技的な要素を含ませながら練習をして来ました。

その練習中には数々のドラマがありました。騎馬戦の練習で負けて **騎馬戦の日はお休みする!**と言ったり、かけっこで最下位になると泣いて **もう走りたくない**といってしゃがみこんだり、走り縄跳びでは **うまく出来な〜い**と言つて怒ったり、体操では初めは全くしなかったのに少しずつ覚えたところをしはじめたり、お遊戯ではずっと固まったままだったり、リレーでは勝ちたい気持ちからコースを無視して抜かしにかかったり、玉入れでは玉を網にいれるより僕に玉をあてて盛り上がっていたり、とどめは行進すると何処にいくやら……。

上記の姿から始まったのです。そして運動会当日を迎えるのです。そのような過程を踏まえて運動会当日子ども達の姿を見て欲しいと思っています。

当日はいつもと全く雰囲気違います。先生方だって緊張します。その姿に子ども達も **今日はずいぶん違うぞ**と空気を読み取り緊張します。ですから、練習通りとはいかない場面もあるでしょうが、広く、深い視野で子ども達を応援して下さい!

そして在園児さんは昨年度(一昨年度)の姿をよく思い出して欲しいと思います。新入園児さんは今回の姿を良く覚えておいて欲しいと思っています。

卒園児の姿を見に小学校に行きました。今はもう6年生で、行進したり、徒競走に参加している姿をみて **すごい**と感動しました。これあたり前じゃないです!

独り言

僕は北海道の、家族総出のお祭りのような運動会を知った時、『これはこれで良い』と思いました。お弁当を準備するお母さん方に見てみたら大変ですよ。前日から場所取りに出動するお父さん方も大変ですよ。

でも僕の知っている小学校の運動会は平日の運動会でお母さん方しか見に来ていませんでした。

当時、運動会を理由にお父さんが仕事を休むなんてほとんど無かったように記憶しています。

それぞれに長所短所はありますが、地域ぐるみの活動、関わりが減ってきている時代だからこそ、このようなスタイルも必要ですね。

柿原 勝

ふぞく新聞

7月14日(金)

Vol. 6
(Vol.66)

どうしたかったの？

もうすぐ一学期が終わる今日この頃、あちこちで衝突が見られるようになってきました。この衝突は間違いなく友達との関わりが深まっている証拠です。喧嘩するほど仲が良い」とはよく言ったもので、喧嘩が起こるといふことは、それだけ本音(本心)を言い合えているといふことでもあります。

そんな喧嘩が起こると **先生！○○ちゃんが泣いているー**と呼びに来る子が必ずいます。『よし分かった。今行くー!』と行ってみると数人がまるくなって何やら話しています。

「このような場面でも子ども達は様々な姿を見せます。背中を撫でている子、ティッシュを持ってくる子、先生に状況を説明する子、怒ってにらんでいる子、泣いている子等々。

さて、すぐに喧嘩の原因が分かる時もあるのですが、今回のように **先生!**と呼ばれていった時は「?」「体何が起きたの?」 というようなことの方が多いです。

僕は「こんな時まず始めに言うことは「ごめん、先生何があったか分からないんだけど、誰か分かる?」と聞くと当事者じゃない誰かがヒントをくれます。

△○○と△△△が喧嘩したの」といふところまで(＝当事者が分かるところまで)聞くことが出来たら「ありがとう」「じゃあ困った時はまた助けて、後は二人に聞くから」と言ってみんなから二人を離してねえ、○○はどうしたかったの?」「と聞き、同じように△△はどうしたかったの?」「と聞きまします。すると二人の言い分はそれなりにどちらも筋が通っていることが多々あります。そしてそこを丁寧に繋ぐのです。

【つづき】

もし、「何でそんなことするの!」「と二人に注意したら、子ども達は「怒られる」と勝手に判断してなかなか本音を話してくれなくなります。

だからこそ、何がしたかったのかを聞くことによって、状況を理解するのです。

先生の仕事はただ喧嘩を仲裁して仲直りさせるだけではないと思っ

ています。自分の思っていることをこんな時こそ言えるようになって欲しいと思っと思っています。その思いと思いを繋いでいくことで、最終的に自分たちが考えさせていくことが出来るとより良いと思っしています。変に、大人の価値観を押し付けてはいけないと、こんな時は思うのです。 柿原 勝

ふぞく新聞

9月1日(金)

Vol. 7
(Vol.67)

変わるのは子ども、 それとも・・・

今年の夏休みには貴重な講演を多数聞くことが出来ました。その講演を聞いていて感じたことは、『子ども達はそのままで良い』ということでした。

変わるべきは、子ども達ではなく、我々保育者を始めとする大人の方だということです。意識を変えることがまず第一歩です。

大人の意識が変わり、声掛けが変わると、子ども達にも変化が見られるようになります。

今意識している言葉は、『ありがとう』をもっと頻繁に使おうということとです。お部屋で子ども達が何気なくしていること(例えば、落ちている物を拾う。机を真っ直ぐになおす等)に対して

『ありがとう』○○ちゃん』と一言と『はい』と返事がくるくらいです。

保育者を始め、大人は色々な経験から子ども達の為に良かれと思って色々なことを教えたり、アドバイスしたりします。それは確かに必要ですが、子ども達が本当に教えるを求めているか、アドバイスを求めているかを無視してはいけないと思うのです。

困っている時に助ける、分からない所を教える、迷っている時にアドバイスをする。このタイミングが大事だと思うのです。求めているのに色々と言われたら大人だって嫌ですよね。まさに『天きなお世話です』

子ども達に良かれと思っしていることも改めて見直してみることが大切です。

講演会の中で講師の先生は『公教育の責任』という言葉を出して現在の世の中の事もお話しして下さいました。僕も、幼児教育の責任を感じながら、未来の芽を摘むことの無いよう心掛けていきたいです。

独り言

僕の声掛けが変わること、クラスの子どもの表情、反応がどんな変わっていくのが良く分かります。

恥ずかしい話ですが、以前僕はむちゃくちゃ怒っていました。当人は注意しているつもりでしたが、今思えば真意がどこまで伝わったのか定かではありません。

今までなら、『何やってるんだあ』と怒鳴っている場面、心の中で一呼吸おき、『怒らないくてもいい方法を考えろ』と心の中で呟くのです。そして、怒らず、

逆におもしろいことに切替えて伝えると得てしてその後クラスの雰囲気の良い、真意が伝わるのが良いのです。

柿原 勝

ふぞく新聞

9月15日(金)

Vol. 8

(Vol.68)

子どもが大好きな言葉

子ども達と色々な話をさせてもらっているからなのか、子ども達が妙に反応するキーワードを知っています。と言うよりも僕も子ども時代に反応していたように思うのです。

それらは『ウンチ』・『おならぶー』・『おしっこビーム』・『鞆クソボール』等々です。

保育で子ども達に色々な話をする際もこれらのキーワードを意図的に入れて声を掛ける時が実際にあります。

父母の皆様からしたら、もう下品なんだから本当に！」と思われるかもしれないが、僕はとても大切だと考えています。

これらの生理現象に対して大人が変に反応し過ぎることに危惧さえ感じています。今回はこのことについてもう少し深く探ってみます。

子ども達に大人気の絵本があります。タイトルは「うんちうち」(ステファニー・ブレイク作・絵PHP研究所)この絵本の、主人公のうさぎの子は言葉をたった一つしか言えないという内容で、その言葉が「うんちうち」だったのです。これ以上は実際に絵本を見て欲しいと思いますが、この絵本を通じて感じたことは、なんだ、子ども達のキーワードは日本だけのものではないのだ」ということでした。

その他にも色々なウンチ等を題材とした絵本があります。子ども達が何度も先生読んで！」と持ってくる絵本が多いです。

保育園時代、トイレでウンチにきよなら」と言っている子どものウンチを僕が勝手に流してしまい泣かれたことがありました。これこそ大人が勝手に汚い等と思っている典型的な出来事の一つで反省……。

独り言

上段の話のまとめとして、確かに臭い匂いがします。子ども達だつて汚いと思つていないわけではありません。

ただ子ども達にとつてそれがすぐに当てはまるかという別問題だと思つたのです。

自分の生理現象にたいして日々の生活の中で少しずつ受け入れ始めているのです。まさに幼児期はその時期です。

その幼児期に汚い物、悪い物のような感覚で扱うことで、大切なことがねじまがっているように思います。以前テレビで幼稚園でウンチが出来ない子が増えているというのを聞き、常日頃から身近にこれらの言葉を使うようにしようという決めたのでした。 柿原 勝

ふぞく新聞

9月29日(金)

Vol. 9
(Vol.69)

なんでも出来る子！！

ふぞく幼稚園の遊びのスタイルは『自由遊び』と設定保育Ⅱ各クラスの担任が年齢に合わせて計画する保育』の二本柱です。

『自由遊び』はその名の通り、子ども達が好きな遊びを選んで遊んでいます。サッカーをする子、ブランコをする子、虫取りをする子、積み木やブロックで遊ぶ子、ままぐと遊びをする子等々です。

『設定保育』では子ども達みんなが楽しめるように工夫はしますが、中には『その遊び嫌い』と言う子も勿論います。絵を描くのが好きな子もいます。物を作るのが得意な子もいます。運動遊びが大好きな子もいます。それから何でも出来るオールマイティな子もいます。そんな子ども達を見ていて感じる『ことがあるのです』。

確かに何でも出来る子は子ども達からも尊敬の眼差しで見られているのを感じます。その本人が無理をしているわけではなく、自然に出来るならそれは本当に凄いとだと僕も思います。

ただここで気を付けなくてはいけないことは、『みんなに無意識に万能を求めること』だと思えます。子ども達は誰だって誉められたいのです。先生に、お父さんに、そしてお母さんに、その為には時には無理(いや無茶)をしてめーいっばい背伸びをする子もいるでしょう。それは条件付愛情だと思えます。言い換えると何かが出来ると好みます。言いつくす。そうではなく、ありのままの姿を受け入れる。つまり長所も、短所も含めて好きという感じ。そうなる短所はさておき長所を誉めていくだけで良いように思っています。

独り言

上記の内容(子ども達のありのままを受け入れる)はここ数年色々な講師の先生方が言っていることで、子ども達との関わりの中で最終的に行き着くところなのではないかと思っています。

小学校一年生が人生のゴールならば、幼稚園等の幼児教育に関わっている機関はもっと色々なことを教育したり、指示したりしなくては行かないかもしれないが、人生八〇年代です。六歳がゴールなわけはありません。確かにスムーズに小学校生活に入っていくという考えがあるのは認めますが、例えつまずいたって何とかしていく力を幼児期からつけることが大切だと思いません。 柿原 勝

ふぞく新聞

10月13日(金)

Vol. 10
(Vol.70)

目には見えないものを 想像しながら楽しむ姿

きょうはなんのひ?」瀬田貞二作・林明子絵
福音館書店発行」という絵本があります。まみこ
ちゃんという女の子が結婚記念日のお祝いの手
紙を色々なところに隠してあるのを見つけていく
という内容なのですが…、説明するよりも見て
頂けたらと思います。

この絵本にちなんだ遊びを幼稚園でも行って
みました。その際に誰がその手紙を隠したかは
内緒(〓あやふや)幼稚園の『ぬし』という設定
にしてあります。

手紙が数枚見つかりと「キヤー」とか「次はどこ
にあるんだ?」と言いながら嬉しそうにしている
子もいれば、「先生こわい!」と言ってしがみつ
てくる子もいます。その様子を見ながら子ども
達の感性の豊かさに心が躍るのです!

手紙を次々と見つけてその中味について
色々と考え最後の宝の場所を先読みしてい
る子がいる横で、「ん?怪しいぞ?」と僕に
声を掛けてくる子がいました。何が怪しい
の?」と聞くと「あの天井のところが少し膨
らんでいるのが怪しい」というのです。

昨日まではそんなことはなかった!」と言
い張るのです。(僕からすると昨日のまま
す)更に「まさる先生も知らないというこ
は園長先生か?」と部屋に入ってきた園長
先生に問い詰めていました。園長先生も他
の先生もとぼけてくれたので謎は更に深ま
って「うーん、ぬしは一体誰だ?」と宝のこ
ぼえびせんを食べながらもずっと考えてい
る子が数名いました。とどめは、その天井を
疑っている子が天井に向かって「おいしいお
菓子をありがとっございました」と土下座し
てお礼を言っていたのです。

独り言

この上段の話に
はまだまだ続きが
あって、これには
職員が本当に振り
回されました。

お弁当を食べ終
えても子ども達の
心の中は『幼稚園
のぬし』でいっぱ
いなのです。ある
一人の女の子が
「ブランコに変な
ひとが座ってい
た」と言っていて子
も達同士で盛り上
がっているのだ
です。その噂は瞬
間に広がり別な男
の子が「先生、ブ
ランコの所に見た
ことのない人が座
っていたって!」
と報告に来まし
た。タイミングが
悪いことにここ数
日教育委員会から
四件の不審者情報
がFAXで届いて
いたので職員はそ
の子ども達の空想
の人物に「どんな
格好していた?」
と悩まされたので
した。柿原 勝

ふぞく新聞

10月27日(金)

Vol. 11
(Vol.71)

子ども達で考える！！

設定保育に入る直前のお話です。絵本を読み終わった後、「これから何をするか」といって話し始めようとすると、あるテーブルでお友達同士が言い合っています。何があったの?」と近くに行き三人のお友達に状況を聞くと〇〇ちゃんがお弁当の後、△△ちゃんとブランコで二人乗りしたいんだけど☆☆ちゃんがダメって言うの」と教えてくれました。

するとすかさず、☆☆ちゃんは「だって、私も△△ちゃんと乗りたいんだもん!」と教えてくれました。

それに対して、〇〇ちゃんは「だから順番に乗るのはどう?」と提案しています。

設定保育に入りたい気持ちもありましたが、これは大切な時と思い、時間を割くことに!

周りの子ども達は「?」という感じになってきたので、みんな、きりん組に小学五年生みたいなお友達がいる」自分たちで色々なことを考えて言っているんだけど!」

他のお友達にも後で聞くから」と言ってもう少しその三人の会話に耳を傾けると、

順番はやダ」私達の(二人乗りの)隣で二人で乗るのはいいけど」と答える☆☆ちゃん。二人のやりとりを黙って見守る△△ちゃん。

そ」までの会話を みんなはどう思う?」

印をつぶって考えてみて」と話し、☆☆ちゃんの気持ち分かる?」と聞くと「わかる」じゃあ〇〇ちゃんの気持ちは?」と聞くと「最悪!」との声。そして順番について一度僕から解説をしてから(一度譲っても又乗れることを)、△△ちゃんに「どっちと乗りたいの?」と聞くと「どっちも」のこと。

【ふぞく】

この三人は最近よく衝突しています。

その内容は、△△ちゃんをめぐっての衝突がほとんどです。だから僕はどっちが良いとか悪いとかでは解決出来ないと考えています。

さてこの三人、お弁当の後どうしたと思いますか?僕はサッカーに誘われてその三人の姿は見ていませんでした。

お片付けの直前に別のお友達から「先生、順番に乗っているよ」と声を掛けられました。

見てみると確かに順番に乗っています。そこでブランコのとこへ行き、「お、六年生みたいなきりんさん」と声を掛けると、〇〇と☆☆が二人乗りしながら笑っていました。

柿原 勝

ふぞく新聞

11月10日(金)

Vol. 12

(Vol.72)

遊びの段階が見えます

ふぞく幼稚園ではサッカーを楽しんでいる子がたくさんいます。これは子ども達から子ども達へ自然と受け継がれている遊びの一つです。そのサッカーを近隣の保育園と試合を行うことで更に深めているのですが、とっても嬉しく思うのは、勝ち負け以上に、その交流会後の子ども達の姿(＝取り組み方)なのです。最初の頃は、先生対子ども達から始め、先生に勝つのが楽しいといった感じでした。その内子ども達同士でチームを作りそこに先生が交ざってバランスをとっていきます。ルールが共有化されてくると先生は審判役のみでもOKです。(しかしいないと盛り上がる前に衝突が起きます)そして今ならば、ボールさえあれば、先生がいなくても子ども達だけで楽しめるのです。

上段の件で、「二」数年の子ども達のことを良く思い出してみると、勝った時の方がその行動が顕著になって表れているように思います。(勝ったことによる喜び・自信がよりそうさせているのでしょう)
サッカーだけではなく、どんな遊びも段階があり、自分達だけで遊べる様になるには、それなりの経験が必要なのです。
卒園した小学生が幼稚園に遊びに来た時によく一緒に遊ぶのですが、小学生でも大人の支え(＝僕は『ぎっかけづくり』と捉えています)が必要な時があると感じています。
最近の子ども達は大人の支えがないと遊べないのか?と思う方がいるかもしれませんが、これが縦の繋がりの少ない現代社会の問題です。つまり、近所のお兄ちゃん、お姉ちゃんから遊びを自然と学べない(見せてもらえない)環境なのです。

独り言

僕が五歳だった頃、六年生から幼稚園年長さんまで一緒に遊んでいました。よく近隣の公園に行きみんな野球をしました。を覚えていきます。大きいお兄ちゃん達は格好が良かったという感覚は今も鮮明にあります。

野球をすればホームランを打つし、小さい僕らには優しく接してくれるし(下から投げたりして打ちやすいように配慮してくれました)「僕も大きくなったらあの人みたいになりたい。なろう。」と思ったのです。子ども達の遊びの段階を知ることが保育者として当然重要ですが、それ以上に遊びのモデルになることの方がとっても大切だと思っております。
柿原 勝

ふぞく新聞

11月28日(火)

Vol. 13
(Vol.73)

子ども達をとりまく 環境について考える

この間、学習会がありました。今回の講師は大阪の超メジャーな先生でした。(初めて講演を聞いた時の衝撃は凄く、今の保育の土台となっているのは間違いありません)

お遊戯会の準備の関係上、学習会でお話しを聞くことは出来ませんでした。懇親会で直接質問をすることが出来ました。

僕は現在の幼児を取り巻く環境をもっとスロ―にすべきだと考えているのですが、先生は幼稚園(幼児教育)についてどうお考えですか?」と質問したところ、幼稚園運営は園児数と直結しているという点からどうしても、大人の目に(評価として)見えるわかり易いものや、伝わり易いものを用いる傾向にある。それ自体が悪いわけではないが・・・」と答えて下さいました。

僕は上記の話をもとに現在の日本の幼稚園を批判したり、反対する気は勿論ありません。それどころか、子ども達の中に、幼児

の段階から取り組んだことで自信をもち、そのことで他の分野も積極的に取り組めるようになった子がいることも知っています。

では何が言いたいかと言うと、現在の子ども達を取り巻く環境は昔とは明らかに違い

(正確にはどんどん加速し)、評価や競争が絶え間なく、くつついてくるという中で日々

過剰しているという事実です。

自意識過剰な子ども達、自己肯定感の低い子ども達、大人から見た良い子になろう

と背伸びする子ども達が自然と増えていく環境にあるのです。お母さんや教育機関を

責めるのではなく、今すべき事は目の前の

子に丁寧に接することだと思っております。

独り言

何故、今回このような内容をこの時期に書いたかと言いますと、最近の教育機関へのマスコミの対応や教育機関の代表者の対応やそれについて意見している人達等に疑問を感じているからです。

きっと子ども達はサインを出していたはず。そのサインを見逃したのは凄くスピードの中で見過ごしたからではないでしょうか?

そんなに大人達が急いでいたら、子ども達は声を掛けることが出来るでしょうか? 「あの・・・」と声を掛けることさえも出来ない雰囲気って大人でも色々な場面で見えますよね。そんな時「なに?」「どうしたの?」「良ければ聞くとよ」と言える大人に! 柿原 勝

ふぞく新聞

12月15日(金)

Vol. 14
(Vol.74)

あまい自立つことでは あいませんが……

年長さんにもなれば、お弁当の時間はいつもの時間で、特に変わらない姿に思えるかもしれませんが、そんな場面だからこそ成長や変化が顕著に見えることもあります。

毎回「先生、やって!」とお弁当を僕に(大判ハンカチに)包んでもらおうとする子がいます。年長さんは基本的に自分でやるように声を掛けています。又、五月の段階では家でも教えてあげて下さい」と呼びかけています。

もうすぐ二学期も終了するわけですから「大丈夫?」と思われる方がいるかもしれませんが、そんなときこそ「はいよ!」と快く返事して包みます。(勿論その横で包むのを見せたり、ちよつと抑えてもらったりと何気ないアプローチはしています)

そんなある日、いつものいように「先生!」と僕に声を掛けてきました。僕はお弁当を包むつもりでその子の近くに行くと「できた!」と笑顔で僕に見せるのです。

「おー!」自分で出来たの?」と僕が聞くと「うん」ととても嬉しそうです。

ちゃんと僕がするのを見ていたのですね。確かに時間はかかりましたが、自分でしてみた』という姿勢にはかなり意味があると思うのです。

あまり自立つことではないかもしれませんが、僕はこのような積み重ねを今までよく見落としてきました。『出来て当たり前』というのにはやはりないのです。

面白いのは(不思議なのは)、僕が「もう大丈夫!」と思っていると「先生、やって!」と時々言いにくる事です。そんな時こそ「はいよ!」と快くするよう心掛けています。

独り言

お弁当の話をしたので、それに関連することをもう一つ。

初めてのお弁当の時に見せる子ども達の『はやく食べたくて仕方がないといった姿』に感動していたはずなのに、年長さんのこの時期になると、いつもの流れの一つとしてそこに心がこもっていない自分がいるのが分かります。

子ども達は「今日は先生に隣に座ってもらって一緒に食べよう」とワクワクしているのに「先生、同じだね」と以前僕が持ってきたおかずのことをちゃんと覚えていて話し掛けているのに……。

本当に大切なこととして、こういう気持ちや姿勢だと思ふのです。日々反省、日々勉強!

柿原 勝

ふぞく新聞

2月2日(金)

Vol. 15
(Vol.75)

子ども達にとってのお金

『金銭教育』という言葉を目にするようになってきたのは平成十三年頃でした。

子ども達はお金について、物との繋がりについてどう思っているのだろうかを知りたいと思い、平成十四年に保護者に十円玉をお願いし、子ども達と買い物に出掛けてみたのです。(この保育は今も継続していて年長さんは二十一円を持って買い物に行っています)

「十円玉で何が買えるのか?」を実感して欲しいと思ったのです。

子ども達は日頃から**先生、僕五百円持っているよ!**とか**紙のお金も持っているよ!**と教えてくれます。さあ、子ども達はどの位お金と物の繋がりを知っていると思いますか? 買い物に行くとき々なことが分かってきました。

その前に、買い物に行くというところがとても楽しい(楽しみ)ということをお知らせしておきます。**何買う?」「私カムにしようかなあ?」「おもちゃも買えるかなあ?」**と会話はずんでいます。

更に自分の財布を自分で持つということもとても大切です。大事に大事に財布を持っている子、首にぶら下げながら手でも握っている子等々。

買い物よりもその過程を楽しんでいるのが「**二**」からも感じられますね。

いざ、買い物です。十円のお菓子を二つ買う子、二十一円のお菓子を一つ買う子、いつも買っているおもちゃを買おうとする子、四

つもお菓子を買おうとする子、三十二円のお菓子を買いたいなあと最後まで悩む子もいました。この保育のまとめは幼稚園に戻ってから行いました。その続きは下段で。

【つづき】

幼稚園に戻り、みんなに、買い物のお話を聞いた後、「じゃあ、園長先生がみんなの為に買ってくれたこの新しい絵本は茶色のお金(十円)を何枚したら買えると思う?」と聞きました。

八百円の絵本だったのですが、子ども達に三択で聞くと「十枚」「二十枚」で多くの子が手を挙げていました。「正解は八十枚でした」というと「**えー、そんなに**」という反応です。更に五千円のおもちゃについて同じ様に質問すると、「**五百枚!**」とただただ驚いていました。

お年玉の金額がアップしている時代ですが、子ども達って本当は枚数が多い方が嬉しいのかも思っていました。柿原 勝

ふぞく新聞

2月16(金)

Vol. 16
(Vol.76)

いい子ってどんな子？

十八年度最後の懇談会がありました。その中で印象的な言葉を聞きました。

「以前より甘える(甘えられる)ようになった」

「いわゆるいい子から手が掛かる子になった」

「わがままな面をみせるようになった」という

内容でした。(良い意味で話されていました)

常々、『いい子って?』と思っているので、今回は

その事について改めて考えてみました。

子ども達は先生に誉められたい(好かれたい)

と思い、先生に気に入られるような態度や行動

をとることがあります。でも、その態度や行動は

明らかに無理をしていると感じる時があるので

す。その無理をしていることに気付いてあげるこ

とが出来ず、更にそのことを誉めてしまうと子ど

も達はどうなってしまうのでしょうか……。

短い期間ならばそれでも良いでしょう。で

も1ヶ月・半年とそのような態度や行動をと

り続けることには無理があります。いつか緊

張(偽り)の糸は切れてしまうことでしょう。

勿論やり直しはきくし、取り戻しも出来ま

すがそうなる前に、無理をさせない雰囲気

(環境)にすることが一番かと思えます。

無理をさせないとは、言い方をかえると

『ありのまま』を受け入れ、認めていくという

ことだと思っております。【このことを土台に集

団性・社会性を育てていくことが大切だと考

えています】

今回のタイトルは『いい子ってどんな子?』

(富山房)という絵本のタイトルでもありま

す。この絵本を是非読んで頂けたらと思っ

ています。他にも、『つまでもすきでいづくれ

る?』(評論社)もお勧めです。子ども達は

大笑いしながら、見聞いていましたよ。

独り言

懇談会では、一年間を振り返ってお母さん方に一言ずつ頂きます。

確かに担任として、出会った一人の大人として一生懸命取り組んできましたが、「深いなあ」「まだまだ分かってへんなあ」と反省するのでした。

常日頃から『当たり前はない』と言いつづけているのですが、あるお母さんが「健康には神経質だと言われくるくらい気を遣いました」とおっしゃっていました。

その園児の園での姿は、汗びっしりになって縄跳びを跳んだり、そり滑りを楽しんでいるのです。

お母さん方の思いを知らずして「これでよし」なんて思っているのではないと思うのです。柿原 勝

ふぞく新聞

3月9日(金)

Vol. 17
(Vol.77)

目に見えるものと 見えないもの

明日はいよいよ卒園式です。入園式の頃の姿を思い出すと本当に 大きくなったなあ、成長したなあ』と思います。

保育の世界に関わるようになって約十三年半が経ちました。まだまだなのは百も承知です。

そんな中、子ども達から教わるのが山ほどありました。大人は「いつい 出来る・出来た」というところに目がいき易く、その際に大きく反応してしまいがちです。

大人の反応が子ども達の気持ちを大きく揺れ動かしていることも忘れて……。

達成感や確かに大事ですが、幼児期から、そこばかりに着目するのは正直「わい気がしています。目に見えないものを信じて、感じる」ことの大切さを伝えていきたいと思うのです。

縄跳びが跳べるようになったり、スケートが出来たようになったりと今まで出来なかったことが出来るようになった際、僕自身も「おー、凄い！」と反応しています。

それも大事なのですが、落とし穴があるのです。

子ども達に一番伝えないといけないことは「○○が出来たね。凄いね。」という表面上のことだけではなく、○○が出来るようになるまで、続けて一生懸命行った気持ちを「すぐに出来てしまう子に対しては出来たからといって、もうするのを止めてしまわない姿勢」を誉めていくことだと思うのです。

子ども達をとりまく環境は厳しく、現在は小さい時から評価を気にしながら生きていかなければいけないような時代です。変わるの大人の方だと思うのです。

独り言

先日、テレビにもよく出ている有名な方の講演会に参加することが出来ました。

「いま、子どもたちは・・・」という演題で、サブタイトルが「私たちにできること、しなければならぬこと」というものでした。

その中でも、変わるの、変えないの、決して子ども達の方ではないという話を話していました。

現在の中高生の問題は話を聞いてみるとまだまだ低年齢化していきそうな危惧を個人的に感じました。

それを防ぐ最も身近な方法として地域の人の関わり、「挨拶」を挙げました。もう一度この基本に戻りたいと思うのです。 柿原 勝